

追悼 西野洋平 さん

西野洋平さんの思い出

桜井 隆 (国立天文台名誉教授, 日本天文学会元会長)

2012年から2015年まで日本天文学会の事務長、1983年から4年間は会計理事を務められた西野洋平さんが、2019年3月2日に亡くられました。72歳でした。

西野さんは長野県の飯田高校を卒業後、1966年5月、東京大学東京天文台に天体捜索部技官として採用されました。主な用務はペーカンカメラによる観測とデータ処理、結果のNASAへの報告でしたが、ほかにも堂平観測所、岡山天体物理観測所で小惑星、彗星などの観測の補助も行っていました。1971年4月に人工衛星国内計算施設に異動し、オペレータ業務や種々ユーティリティプログラムの開発を行う傍ら、1972年4月から4年間、東京電機大学工学部第二部・電気工学科に通い卒業されています。木曾観測所シュミット望遠鏡の微光星測光装置や堂平観測所の多色偏光測光装置の、制御系や解析ソフトウェアの開発にも参加しました。1984年10月に教務技官、1985年10月に文部教官・助手に昇任され、1988年7月、国立天文台の発足と共に、天文学データ解析センター助手、1989年4月に乗鞍コロナ観測所助手に異動されました。2002年6月に助教授に昇任、2004年の法人化後は自然科学研究機構国立天文台太陽観測所主任研究技師という所属、職名となりました。2010年3月に国立天文台を63歳で定年退職され、2012年1月から2015年7月まで日本天文学会事務長に就任されました。2015年7月に退任されるまで3年半の間、事務長を務められました。

私と西野さんの最初の出会いは1975年頃で、私が東京大学天文学教室の博士課程で、学位論文



西野洋平さん近影 (2016年4月撮影)

のため東京天文台の計算機FACOM230-58を使わせてもらっていた頃（ピーク時は全CPU時間の3分の1くらいも使っていた）、西野さんは計算施設技官でオペレータの一人でした。

その後、私が東大天文学教室に就職したり、海外に長期出張したため一時疎遠になりましたが、私が1986年に東京天文台太陽物理部に異動、1989年に西野さんが乗鞍コロナ観測所に異動され、同じ職場（現在の北研究棟3階）となりました。1992年には私が乗鞍コロナ観測所長となってしまい、上司と部下という関係になりました。

西野さんの太陽への異動については、どういう事情があったかは知らされていませんが、当時太陽物理学研究系主幹の平山淳先生から、「大切に、上手に使ってあげてください」と言われたのは覚え

ています。西野さんは口八丁手八丁なので、旧来の太陽、乗鞍の人々にはやや煙たい存在と最初は見られていた様です。乗鞍コロナ観測所の運営では、大体最年長の技術職員が、乗鞍への出張者のチーム編成など全般を仕切る「チーフ」になります。西野さんは2000年からチーフ役になり、2009年のコロナ観測所閉所までこの役を果たされました。チーフになる前も、1999年に発行した写真集「乗鞍コロナ観測所50年のあゆみ」の編集責任者などでリーダーシップを発揮していましたが、チーフ就任後、会議資料や議事録がちゃんと印刷、配布される様になったり、それまで紙に手書きだった観測業務日誌が電子化されたりと、着々と運営の改良がなされました。1988年に開始した乗鞍の共同利用観測、1998年に開始した冬季の無人化、2009年の閉所など、乗鞍コロナ観測所の運営が円滑に進められたのは、西野さんの寄与が極めて大きいです。

西野さんは三鷹と乗鞍の多くの太陽観測装置の開発に貢献されたほか、1991年7月11日のメキシコでの皆既日食へは、末松芳法氏（隊長）、福島英雄氏とともに出張し、観測にも成功しました。西野さんは、仕事が論文になるかどうかの嗅覚も鋭く、例えば屈折望遠鏡4本を束ねた太陽フレア望遠鏡の運用開始直後、望遠鏡相互の平行度が姿勢によるたわみでどのように変化するかを測定して、さっと論文にまとめました（西野洋平、国立天文台報、1993, 1, 391）。また、ひので衛星の開発準備が始まった頃、放射線（実験ではコバルト60からのガンマ線を使用）によるガラスの黒化試験も手際よくまとめています（西野洋平ほか、国立天文台報、1998, 3, 145）。国立天文台の原弘久氏が計画した、乗鞍のコロナグラフによる、フレアに伴う磁気リコネクションフローの検出の試みは、西野さんが自分の乗鞍滞在中に観測を何度も実施し、その結果、リコネクション領域への流入流の兆候が捕らえられ、論文となりました（Hara, H., et al., 2006, ApJ, 648, 712）。

2010年3月に国立天文台を定年退職後、しばらくは三鷹市のシルバー人材センターを通じていろいろ仕事をなさったようですが、2012年1月より日本天文学会の事務長を引き受けられました。そうこうするうち、2013年1月に私が日本天文学会の会長になってしまい、またもや上司と部下の関係になりました。

学会事務所の毎月の定例打ち合わせ会では、議事資料が用意され、終わると議事録が出るという、しっかりした運営がなされていたのはさすがと思われました。しかし、事務所職員の仕事割り振りを、一人が一つの仕事のみ担当するのではなく、繁忙期や急病など非常事態にはほかの職員の仕事もカバーできる様にして事務所の運営を安定させたいという西野事務長の計画はなかなか進まず、また2013年4月からの改正労働契約法の適用開始に伴い、職員の雇用をいつまで継続するかという難しい問題も間近に迫っていました。こういう状況で西野さんは、次の事務長は国立天文台を退職した技術職員ではなく、民間企業でのマネジメントの経験が豊富な人を雇うべきだ、という意味を固めます。ハローワークへの公募は、2015年の春、市川隆会長の時に実施され、現在の佐藤良信事務長が2015年6月に着任しました。

佐藤事務長に引き継いで退任後は、またいろいろな仕事に挑戦されていたようです。しかし最近の2年間は闘病生活で、スポーツマンだった西野さんが痩せてしまわれたのは本当にお気の毒でし



西野洋平作LINEスタンプ「slang pi kun」の一つ。 π にも似ている「兄」のようなイラストは「西」をデフォルメしたもの。（文字の色はオリジナルと異なります。）

た。私が最後にお目にかかったのは、2018年6月30日、守山史生先生（東京天文台名誉教授、2月23日ご逝去）を忍ぶ会を国立天文台で開いたときです。お孫さんにスクラッチのプログラミングを教えているとか、LINEのスタンプを作ったとか、相変わらず好奇心旺盛でした。また次に会ったときに面白いお話を聞ける、と思っていました。

奥様の西野秀子さんも2016年3月まで、国立天文台の太陽部門で長く事務支援員をされていました。洋平さんのご逝去に際し、ご落胆もいかばかりかと思い心が痛みます。謹んで西野洋平さんのご冥福をお祈りします。これまで本当にお世話になりました。

西野洋平さんを偲ぶ

岡村定矩（東京大学EMP）

西野洋平さんは私の恩人の一人である。私は2011年1月に日本天文学会理事長に就任したが、我々執行部の最大の課題は新法人への移行であった。2008年に公益法人に関する制度改革関連法が施行され、日本天文学会も5年以内に新法人に移行する必要があった。我々は公益社団法人を目指していたこともあり、新しい定款と会計システムの作成と承認は難航しそうだった*1。我々の2年間に移行ができなければ最悪の場合、期限切れで解散になるかもという瀬戸際に来ていた。

定款や規則の策定、会計システムの変更など作業の各段階で発生する諸案件を内閣府担当部署へ打診するのは主に事務長の仕事であった。ところが当時の宮下暁彦事務長が、私の理事長就任後まもなく体調を崩されて退職されることになった。この大事なときに一時でも事務長なしでは大変なことになる。そこで私がいわば拝み倒して事務長に来ていただいたのが西野さんだった。こうして西野さんは通常業務に加えて、前例のない仕事を抱える事務長となった。移行作業をする実務理事の会合にも西野さんはこまめに顔をだし、事務所でもいつも朗らかな笑顔で職員の信望を得ていた。写真は、2012年12月28日、旧法人の最後の日（登記が済んだ新法人の最初の日でもある）

に、学会事務所で開いた慰労会の写真である。西野さんも大きな仕事を終えてほっとしているかに見える。

西野さんは私の古くからの友人でもある。私が木曾観測所に赴任してまもない1980年代前半には、西野さんは故磯部瑠三さんらと観測や測定によく観測所に来られていた。いつも笑顔で話す西野さんと私はすぐに仲良くなった。ギターがとても好きで、時と場所は思い出せないのだが（毎年夏に開催していた「シュミットシンポジウム」の懇親会の二次会か？）、木曾の飲み屋さんでギターを弾いていた西野さんのイメージが今でも記憶に残っている。乗鞍コロナ観測所に所属が変わってからは会う機会は少なくなったが、それでも三鷹の天文台で会うときは声を掛け合ってきた。



天文学会事務所にて

*1 天文月報2011年6月号「特別会務案内」参照

た。そのおかげで、学会の事務長をお願いできたわけである。

西野さんを偲び、感謝とともにご冥福をお祈りします。

西野洋平さんを悼む

佐藤英男 (元・国立天文台)

西野洋平さんの突然の訃報を受け、ただただ驚いている。彼と同じ部門で勤務した経験はないが、長きにわたり親しくさせていただいたので、一言追想したい。西野さんは長野県出身で、高校時代は天文部に所属していたという。旧東京天文台天体掃索部に入台し、構内にある合宿所と呼ばれる独身寮で生活を始めた。夜間は構内に設置されていたベーカーナンシュミット望遠鏡 (BN) による人工衛星の観測に主に従事していた。やがて三鷹の夜空も明るくなり、観測に不適な場所となったので、BN装置は堂平観測所 (埼玉県堂平山) に移設された。以後、西野さんは三鷹と観測所との往來を繰り返し、観測を続けることが多くなった。観測所は人里離れた山頂にあるため公共水道はなく、雨水を溜め生活水として利用していた。冬季等の渇水期には観測所は極端な水不足になる。そのため、風呂にも入れない日々が続くと、彼は明け方までの観測後、そのまま数時間かけ、入浴のため三鷹までオートバイで来て、夕方再び観測所に戻ることもあった。

私には西野さんとの大きな思い出がある。望遠鏡の設置である。私は、食連星の基本諸量を決定したり、恒星の不規則変光のカオスの振る舞いを観測的に調べる目的で構内に保管されていた30 cm反射望遠鏡の据付作業を始めた。作業進展が遅く困窮していたとき、西野さんが加わってくれた。お互い本務を別に抱えながらの空き時間の作業であったため、作業は必ずしも順調に運ばなかったが、西野さんのお陰で大きく進展した。西野さんも私も構内にある官舎に住んでいたため、作業の多くは夜間に行った。西野さんの助力



愛用のギターを楽しむ、ありし日の西野さん

なしでは完成は大幅に遅れていただろう。

西野さんはスポーツマンだった。台内の野球部に所属し、打順は4番、守備はサードで中心的な存在であった。年一度の東大総長杯にチームとして参加したときは大いに活躍した。西野さんは野球だけでなく、卓球、テニスもこなし、近隣大学との交流大会にも参加していた。また、古典音楽にも造詣が深かった。昔、都心でのコンサートの帰途、海鮮料理店に立ち寄り夕食をともにしたとき、魚の食べ方があまりに上手なのでそれを褒めたら、長野県は海がないので、海辺の人に笑われないように、魚は丁寧に食べなさいと教えられた、とにこやかに話していた事を思い出す。

西野さんほど多くの方々から愛された人も珍しい。責任感が強く、性格は温厚、明るくユーモアもたっぷりあり、若い人からも慕われ、傍にいただけで場を和ませる存在だった。私は西野さんの怒った顔や様子をみたことがないしそれを聞いたこともない。西野さんのお嬢さんが私の息子と同

学年だったこともあり、家族ぐるみ親しくさせていただいた。

西野さんは定年後、日本天文学会に勤務する傍ら、数年間放送大学非常勤教員として観測天文学を担当した。受講学生らが天文サークルを結成したとき、その顧問役を依頼され、学生らとの交流もはかり、天文普及活動にも努めた。また、乗鞍コロナ観測所の閉鎖に伴い、コロナグラフの今後に懸念を示した。ペルーの太陽観測所に装置が寄贈されるようならば、自ら赴き、その据付作業や観測手法を現地スタッフに指導し、両国の国際協力関係の一助になれば嬉しいと強い意欲を持っていた。これも道半ばとなり悔やまれてならな

い。また、西野さんは最近まで国立天文台特別共同利用研究室に来て仕事を続けていた。私は2018年末、西野さんとこの研究室でお会いしたとき、「今、乗鞍コロナ観測所周辺の山岳地形を3Dプリンターで作成中なんだ。やがて完成したら佐藤さんにもあげるよ」と明るく話してくれた。西野さんが病気になり、手術を終えたことは知っていた。この日、頬は以前よりもやや細い感じだったが、血色もよく明朗快活に振舞っていたので、病気も症状も順当に回復し、日頃の西野さんに戻ってきているとばかり思っていた。

これまでの西野さんとの公私にわたるお付き合いに感謝し、併せて心よりご冥福を祈りたい。

国境を越えての友情

イシツカ ホセ (ペルー国立中央大学)

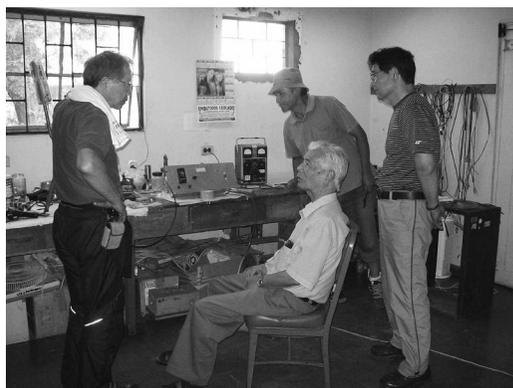
私は現在ペルーのワンカイヨ地区にある国立中央大学の電気電子工学部で科学顧問として働いています。西野さんが亡くなられたことを知ったのは、以前ペルーでJICAのシニアボランティアをしていた根本しおみさんからでした。ご家族の方々にお悔やみを申し上げます。西野さんには大変お世話になりました。

父・石塚睦がペルーへ来て最初にした仕事は、ヘルタイプ太陽分光器で観測をすることでした。そのシーロスタットのグレードアップの為に、日本の西村製作所製のシーロスタットに入れ替えました。この装置はワンカイヨ観測所に設置してあり、残念ながら1982年の火事で太陽分光器の大部分が焼けてしまっていました。シーロスタットは幸い焼失を免れましたが、二枚の鏡の状態は良くありませんでした。これを二年間かけて交換しました。二枚目の鏡を日本から送り、設置出来たのが去年の12月でした。このことを西野さんにお知らせしたかったです。

西野さんは2009年からペルーの太陽分光器に

関わってくれていました。最初はワンカイヨのシーロスタットの駆動系の修理の為、二週間程アンコン観測所へ来られて駆動系を改造してくれました(写真は父との打ち合わせの様子)。

二回目にペルーへ来たのが2014年でした。



アンコン観測所で父・石塚睦と話をしている西野さんの様子。左より、西野さん、石塚睦(椅子)、ペルー地球物理研究所のデラクルス氏(奥)、西野さんと一緒に来た元国立天文台の宮崎英昭さん。写真は現在京都大学に留学しているDenis Cabezas氏が撮影。

シーロスタットをリマの南にあるイカ国立大学の太陽観測所へ持って行き、設置する為でした。設置が終わり、イカ大学のロアイサ先生が自宅に招待してくれました。そこで食事をした後、踊りと歌で完成パーティーを楽しみました。西野さんはギターを弾いて日本の歌を歌ってくれました。

西野さんの性格はラテン系の人にとっても親しまれやすい性格でした。よくギターを弾いて皆さんを楽しませてくれました。私も日本での留学が終わり、ペルーへ戻る前に三鷹の国立天文台で送

別会を開いていただいた時、西野さんと一緒にギターを弾いてワンカイヨのワイノを演奏しました。これが日本でのお別れ、そして西野さんとの楽しい時間でした。

これからはきっと、イカ大学の学生が、西野さんが改造した太陽分光器で研究して、論文を書くことができると思います。ペルーの天文学の発展のために尽力して下さった西野さん、本当にありがとうございました。

いつもそこには西野洋平さん

縣 秀彦 (国立天文台)

西野洋平さんは、合同会社科学成果普及機構(2010年6月設立)の業務執行社員として、お亡くなりになる直前まで、天文学の普及や地域の活性化に尽力されました。科学成果普及機構とは、国立天文台等の研究成果を学術界のみに留めることなく、広く社会に還元することで、科学研究の持続的発展および科学文化による地域の活性化を目指して、地元三鷹市の協力を得て国立天文台の有志11人が立ち上げた合同会社です。ちょうど国立天文台退職を迎えていた西野さんは一早く私たちの構想に賛同し、退職後にもご自身が活躍できる場の一つとしてこの会社の設立、つまり出資に参加されました。

まず、西野さんと取り組んだのは2012年金環日食に向けての安価な日食観察用具の開発でした。太陽観察は危険を伴うため、西野さんの経験や専門性が頼りでしたが、幾多の困難の後、幸い2種類の安価な用具の開発に成功し、募金を集めて福島県の学校や避難所に6万枚の「日食安全観察シート」を無料で配布しました。苦勞の多い作業でしたが、子どもたちから送られてきたお礼状

に目を細めて満足そうに読まれていた西野さんの表情が忘れられません。

天文イベントや観望会の運営にも尽力されました。豊洲市場の隣に完成した巨大タワーマンションの屋上に天文台が設置され、年に数回、観望会や天体写真講習会の講師を担当されました。豊洲は遠いので、帰りは深夜になってしまう仕事にも関わらず、手術後の体力が落ちてきた頃でも、西野さんは常にハツラツとして参加されました。

思えば、西野さんに初めて出会ったのは、1983年冬で、北軽井沢に向かう故磯部瑠三さんの車の中だったと記憶しています。堂平観測所でもお会いすることがありました。当時の東京天文台で、西野さんだけは学部生だった私にも気さくに話しかけて下さり、威張ったり、怒ったりされたことが一度もありませんでした。私が失敗した際には優しく慰めて下さったことを思い出します。長年に渡りお世話になりました。西野さん、ありがとうございました。ご冥福をお祈りします。